学校便り　6月号

かけはし

学校 HP　学校ﾌﾞﾛｸﾞ

薩摩川内市立里小学校　薩摩川内市里町里 1601　TEL 09969-3-2008
発　行　令和５年６月１６日　　責任者　校長　永野 俊也

里周辺海水温
23.6 ℃(6/11)

綱 と 絆

市小学校綱引競技大会から学んだこと

校長　永野 俊也

WBC 侍ジャパンの優勝後もスポーツ界では、明るい話題が多く、胸高鳴るシーンを数多く見ることができ、とても嬉しく思っています。最近では、全仏オープンテニスの女子ダブルスで失格となってしまった加藤未唯さんが、気持ちを切り替え臨んだ混合ダブルスで、見事優勝を果たしました。なんとドラマティクなのだろうとその勝利を喜びました。また、同大会の車いすテニス男子シングルでは、17 歳の小田凱人（ときと）さんが、史上最年少で制し、同時に世界ランキング１位となりました。病気で車いす生活となった小田さんは、パラリンピックの舞台で戦う国枝慎吾選手の姿を見て、車いすのイメージがガラッと変わったといいます。この大会を過去８回制した国枝選手が引退し、およそ半年、国枝選手の姿に惹かれ、後を追いかけてきた若者の快挙に胸が熱くなりました。

そのほか、男女とも全日本バレーボールが盛り上がっています。私が小学２年生の時ちょうどミュンヘンオリンピックがありました。当時、「ミュンヘンへの道」という実際の男子バレー選手たちにスポットを当てたアニメがあり、そのアニメの流れでオリンピックを見た記憶があります。男子バレー優勝！その熱く感動的なシーンは今でも覚えています。それから日本のバレーは、世界の高い壁に阻まれ、「もう日本のバレーは通用しないのか？」と長く苦しい時間が続きました。それでもずっと努力を続けバレーへの思いをバトンとして次の世代へと渡してきた思いが、世界を相手に今花開こうとしていると感じました。話を綱引競技大会に移します。

去る６月２日、サンアリーナせんだいで市小学校綱引競技大会が開催されました。市内の小学生 1000 名以上が一堂に会し、観客を入れての開催は３年ぶりということでした。会場はものすごい熱気につつまれていました。開会式に先立ち、大人による模範演技の練習が始まりました。「ﾋﾟｯｸ･ｱｯﾌﾟ･ｻﾞ・ﾛｰﾌﾟ」(ﾛｰﾌﾟを持って)「ｽﾃﾃﾞｨ」(よーい)の声から拍手がおこり「ﾌﾟﾙ」(ｺﾞｰ)の瞬間、会場のすべての空気が、ビシっと音を立て張りつめた綱と同じように、一瞬で張りつめます。そして力と力の均衡が保たれる時間が続いていくと、また拍手が湧き起こってくるのです。開会前から会場の一体感を感じました。

そして予選リーグが始まると、全８レーンの綱で、一斉に競技が行われるため、会場はものすごい歓声に包まれていきます。里小学校の子供たちは、その空気の中、多少緊張した面持ちでしたが、担任の先生方の声かけにより、表情が和み、いつも通りの体勢を取り、初戦を制して以降、完全に自分たちのペースで試合を運んでいたように思います。そして予選リーグ、決勝トーナメントを通して、自ら組み立てた姿勢がほぼ崩れることなく↗すべての試合が終了しました。綱引競技を見て、パワーゲームなのに意外にも「こんなに美しいんだ！」という感想を持ちました。互いの力の差を埋め、凸凹がないよう一直線に張られた綱、その綱を握りしめる一人一人が自分の持ち場でそれぞれの役割を果たし、綱と一体となっている姿に「なんてきれいなんだ！」と感動したのです。

昨年の 11 月末の大会を制した６年生からバトンを引き継ぎ、５年生は12月からこつこつと練習に励みました。そして年度が替わり、新５年生も練習に参加し、互いに技を磨く姿がありました。その練習はとても和やかで、指導に当たってくれるコーチや、先生方への感謝を忘れない姿もありました。また、練習の終盤、お互いの練習の中では、尻餅をついたり、綱が左右にぶれたりということがありましたが、その様子を見て、これは練習時の対戦が拮抗しているからで「最強のライバルは自分たちとなるよう、コーチや先生方が育ててくれていたんだ。だから本番ではあんなに堂々と自信を持って、競技に臨めていたんだ。」などの思いにも至りました。

試合の勝利を素朴に喜び、対戦相手への敬意を忘れないところも素敵でした。この綱を通して結ばれた絆は、子供たちにとっては一生の宝となっていくことでしょう。応援してくださった地域の方々、コーチや保護者のみなさまほか多くの方々、そしてなによりも子供たちに「ありがとう」と感謝するよき大会でした。

学び多き　集団宿泊学習

６月１２日（月）～１４日（水）の期間、５・６年生が集団宿泊学習に行ってきました。

今回は、甑島５校合同での宿泊学習となりました。

天候の影響により、少し計画の変更はありましたが三日間の予定をすべて行うことができました。

主に、１日目は、カレー作りやキャンプファイヤー、２日目は、焼板木工や室内オリンピックに取り組みました。

活動に協力しながら取り組む中で、学級のみんなとの絆や他校との交流を深めることができたようです。

きっと素晴らしい思い出ができたと思います。また、集団宿泊学習で学び経験したことを学校生活に生かし、里小のリーダーとして頑張ってほしいと思います。

7月行事

４日（火）ＥＳＴ来校
６日（木）ＡＬＴ来校
７日（金）不審者対応訓練
８日（土）土曜授業
11日（火）校内水泳大会・学級ＰＴＡ
12日（水）クラブ活動
14日（金）ＡＬＴ来校
18日（火）ＥＳＴ来校
20日（木）終業式・大掃除

今月の付録

示現流と鞍馬楊心流が、もし対戦したらどうなるの？　（その１）　創立 150 周年記念誌をより深く楽しく読むために♪

この付録では、記念誌からこぼれてしまったお話をしばらくの間掲載していきます。今月のタイトルに行き着くのは、もう少し先になります。

この里に赴任して、令和元年度里中柔道部が県大会優勝という記事を目にし、「柔道すごいんだ！」という印象を持ちました。そして、鞍馬楊心流の存在を知ります。

鞍馬楊心流を調べていくと、その文化は里を中心として甑島全体に大きな影響を及ぼしており、ぜひ後生に語り継ぎたいと思いました。ではどのように情報発信すればよいのでしょう???

思い浮かんだことは、幕末その剛剣で全国にその名が知られているジゲン流と対比していくと、その性格が伝えやすくなるのではないかという方法でした。また、示現流と自顕流の違いなど、うっすらとしか知らないことを整理するよい機会と捉え（前任の志布志市立有明中の頃、自転車の練習で通る高山城になぜ、「自顕流発祥の地」の看板があるのか？等々）、今回調べて掲載しました。

示現流とその分派である自顕流は、分かれる時にゴタゴタがあり、以来交流はほとんどないように思います。ですから両者を客観的に比較する書籍はほとんどありませんでした。

その中で目に留まったのは、「薩摩拵（こしらえ）」という本です。著者は、調所（ずしょ）一郎　名前を見てピンときましたが、今月の付録の主人公、幕末薩摩藩の家老を務めた **調所広郷**（ひろさと） の子孫にあたられる方です。

近年の再評価により、1998 年鹿児島市の天保山公園に広郷の銅像が設置されました。彼の死後 150 年目のことです。

調所広郷（笑左衛門）は、無禄の下級武士の家に生まれながら、ものすごい勉強をし苦労をしながら、最終的には薩摩藩の家老を務めた方です。その業績は、当時 500 万両（今の価値で 5000 億～ 3500 億円）と言われた藩の借金を、財政改革により、およそ 10 年で 200 万両（諸説有り）の黒字に転じさせたことです。ですから、彼の手腕がなければ、その後、幕末薩摩藩の活躍は考えられず、西郷や大久保といった偉人の誕生もなかったのかもしれません。

その手法は、大阪商人に「借金を無利子で 250 年の分割払いとする」と強要したり、奄美の黒糖の専売に伴い島民に重税を課したりと、「鬼の調所」と呼ばれることになるのですが、彼の性格や置かれた立場を冷静に見ると、やむにやまれぬ対応だったのではないかと思えてきます。

そして彼は、島津斉彬と久光をめぐるお家騒動（お由羅騒動）に巻き込まれ、最終的に藩主に責任が及ばないよう全責任をかぶり、服毒自殺をすることになります。もともと低い身分から家老に取り立てられたため嫉みを一部で買っていたこと、斉彬派から目の敵にされていたこともあり、広郷亡き後、調所家は苦難の道を歩むことになってしまいます。

また、昭和初期の小説家 直木三十五（さんじゅうご）（直木賞は、彼を顕彰して設けられました）のヒット作「南国太平記」では、調所広郷は悪役として描かれていますので、ダークなイメージが定着してしまったように思います。しかしながら、現代では、多くの歴史資料をもとに、その業績が再評価されるようになってきています。

今回、紹介する「薩摩拵」とう本では、その調所広郷の子孫が書いているということで、示現流宗家東郷家と自顕流宗家薬丸家それぞれの当主が、敬意をはらいつつ、互いの剣術と自分の流派について、極めて客観的に文章を寄せており読み応えのある貴重な資料でした。

甑島のことを書いている書籍をはじめ、こういった歴史的に貴重な本の多くは、現在では絶版となっているものが多く、中古市場では大変高額で取引をされています。この「薩摩拵」は、県立図書館をはじめ、公立の図書館には多く収蔵されています。機会がありましたら公立図書館の郷土史コーナーで手にとってご覧になってはいかがでしょうか。

＊　調所広郷は、財政改革に取り組むため、自らも倹約に努めましたが、長期的に見て経済や軍事のためになると考えたことには出資をしています。
有名なものでは、鹿児島市の甲突川にかかっていた５つの石橋は、彼が熊本県の石工 岩永三五郎 を招き作らせたものです。